

平成22年4月23日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520486

研究課題名（和文） 近親言語ポルトガル語・スペイン語間の移行教育と教授法

研究課題名（英文） On transfer learning between two cognate languages, Portuguese and Spanish, and its methodology

研究代表者

水戸 博之（MITO HIROYUKI）

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：80262921

研究代表者の専門分野：スペイン語・ポルトガル語

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ポルトガル語・スペイン語・外国語教育・社会言語学・ラテンアメリカ・芸術諸学・文化・異文化コミュニケーション

## 1. 研究計画の概要

本研究は、近親関係にあるポルトガル語とスペイン語の特に口語における共通点と相違点を、比較言語学のみならず日本人学習者を取り巻く文化社会環境にも配慮した社会言語学的観点から体系的に評価することにより、もう一つの言語あるいは両者を効率的かつ正確に学習する方法論および教授法を確立することを目的としたものである。

## 2. 研究の進捗状況

第1年度（2007）水戸博之（研究代表者）がアルゼンチンにおけるポルトガル語教育の現状、重松由美（研究分担者）がブラジルにおけるスペイン語教育の現状および渡日経験者の言語状況を調査した。この段階で、すでに両国の隣国とその言語に対する認識が、必ずしも双方向のものではないことが明らかになり、研究の視野をより文化的領域へ拡大する必要が生じた。すなわち、アルゼンチン人にとり、ポルトガル語学習はブラジル社会と文化を学ぶことを意味するが、ブラジル人にとってアルゼンチンは選択肢の一つに過ぎないということである。

第2年度（2008）前年度の調査結果から、研究体制を見直し、重松を連携研究者に変更し、さらに西村秀人を連携研究者に加えた。西村は、スペイン語とポルトガル語が隣接および接触するラプラタ地方の言語文化の状況を調査した。現在スペイン語を公用語とするウルグアイの首都モンテビデオにおいてスペイン語とポルトガル語使用に関する歴史文献の収集は、大きな成果であった。重松は、第1年度の調査において収集した資料の分析を行い、教授法への応用として、ポルトガル語学習メソッドの研究に着手した。水戸は、2言語を文法的側面からの比較対照研究を進めた。

第3年度（2009）西村が前年度に引き続きラプラタ地方、特にモンテビデオにおいて得た新たな知見である2言語接触の言語文化的創造の事例として音楽舞踊「ムルガ」を核とした地域活動を調査した。重松は、諸般の事情から、国内における研究に専念した。先行する2年間のブラジルをはじめとする調査の分析結果と在日ブラジル人の言語学習環境との対象研究から、論文等の執筆、学会発表を行い、さらに成果の応用として、スペイン語を既習した日本人に配慮したポルトガル語教材を試作段階まで進めた。

水戸は、スペイン語・ポルトガル語2言語を専攻する海外の研究者との情報交換を進めた。

## 3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

（理由）

初年度より、当初の研究計画を発展的に見直すことを必要とする新たな発見が続いた。経済危機や新型インフルエンザといった悪条件の中でも、海外調査を継続できた。以上のことから、本研究は、当初の計画以上に進展しているといえる。

## 4. 今後の研究の推進方策

当初最終年度としていた平成22年度に研究成果を総括し、まとめて発表する予定であった。幸い研究計画最終年度前年度応募基盤研究（C）22520559「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化圏間の外国語教育と相互理解の諸相」が採択されたことから、新規研究計画の進行とともに、随時具体的成果を発表していく。研究の推進方策としては、大学院生や留学生を含む、研究者との連携と協力を一層拡大強化していく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 重松由美、在日ブラジル人のエスニック・アイデンティティーブラジル人学校の保護者への教育に関するアンケート調査の結果に基づいて、ともに生きる - 2009年度報告書(名古屋学院大学総合研究所多文化共生研究会編)、30-39、2010、有

〔学会発表〕(計1件)

- ① 重松由美、ブラジル人学校児童生徒による日本語使用、多言語化現象研究会 10周年記念研究大会、2009年6月20日、国立民族学博物館